

# 近世初期の文人山荘における 視点場-眺望の景観構造

—京都郊外の光悦寺・詩仙堂・大悲閣・木下長嘯子山荘・藤原惺窩山荘を対象として—

山口 敬太<sup>1</sup>・出村 嘉史<sup>2</sup>・川崎 雅史<sup>3</sup>

<sup>1</sup>学生会員 京都大学大学院工学研究科 博士課程 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂 4)

E-mail: Keita.Yamaguchi@t23x1791.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

<sup>2</sup>正会員 工博 京都大学大学院工学研究科 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂 4)

E-mail: demu@art.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

<sup>3</sup>正会員 工博 京都大学大学院工学研究科 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂 4)

E-mail: kawa@art.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

本研究は、近世の文人山荘を対象とし、文人らの地形認識を文人の残した手記をもとに明らかにしながら、山荘の立地特性と、固有の地形・景観特性をいかした景観デザインの手法を明らかにするものである。対象とした山荘は、地形の凹凸を利用して、隠れ場所としての圍繞性と、風景嘆賞場所としての眺望性を、ともに満たしている場所が立地場所として選ばれていた。山荘では、凹地形を利用し、山深すぎず、都からも近くに居ながら、効果的に隠れられるような視点場をつくりながら、敷地の内で閉じるのではなく、周囲の野や山を自らの庭に見立てて、遠望できる視点場をつくるなどといった、大きなスケールで視点場-眺望の景観構造を有していたことが示唆された。

**キーワード:** 視点場, 眺望, 圍繞景観, 景観構造, 近世, 文人

## 1. はじめに

### (1) 研究の背景と目的, 方法

京都郊外の近世の文人山荘の立地とその景観デザインをみると、周囲のわずかな地形の起伏や緑地がつくる景観特性を非常に効果的に活かし、建築や庭園のスケールを越えて、優れた風景づくりを行っている様子が伺える。都市づくりに、都市の個性である地形や山並みの景観特性を活かすという視点でみると、歴史のなかの風景づくりの優れた事例から学ぶべき知見は多い。

本研究では、近世の文人山荘を対象とし、文人らの地形認識を文人の残した手記をもとに明らかにしながら、山荘の立地特性と、固有の地形・景観特性をいかした景観デザインの手法を明らかにすることを目的とする。具体的には、①文献調査によって、文人らによる地形認識や山荘での風景嘆賞について明らかにし、②GISを用いて山荘の立地地点から可視領域分析を行い、山荘における眺望・圍繞の景観特性を評価し、①の結果と合わせて、立地選定の意図を探る。③山荘の中で現存する事例をとりあげ、景観特性を活かした視点場づくりについて、圍繞性、眺望性、水辺との近接性という観点から評価する。

山荘の立地地点からの可視領域を明らかにするために、国土地理院発行の標高データ「数値地図50m (標高)」

と「数値地図5m (標高)」をもとに、「カシミール」を用いて3次元地形モデルを作成した。

### (2) 研究の位置付け

本研究の視点として、庭園・建築単体のスケールを越えて、周囲の地形や山がつくり出す空間特性に着目し、景域という視点で風景づくりを評価する点に特徴がある。庭園史・建築史という視点ではあまり評価されていなくとも、さらに大きなスケールで捉えれば、非常に優れた景観デザインの実例が多々ある。

樋口は、棲息地の景観、生きられる景観を成り立たせる場所にかくされた固有の特性を把握するために、凹型景観と凸型景観とを区分し、前者は凹性、休息性、「隠れ場所」性を、後者は凸性、意志性、「眺望」性を支配的な特性と捉えた<sup>1)</sup>。そして、景観づくりにおいては、これらの特性をバランスよく組み入れるべきだとした。しなしながら、実例を通じて、これらのバランスに着目し考察した研究はそれほど多くない。本研究によって、これらの実例の分析を通して、土地の個性としての地形や緑地を、人々がどのように認識し、手を加え、風景を創造していったかを明らかにすることで、国土文化の保全と創造のための計画原理やシステムの再発見、再構築のために示唆を与えるだろう。

また、本研究は、風景づくりの優れた事例について、近世初期の文人という、特定の人々を対象とすることで、当時の共通する風景づくりの考え方、デザイン原理を考察しようとする点に特徴がある。

## 2. 近世の文人山荘 <対象地概要と時代背景>

京都の山辺は、周囲を緑豊かな山並みに囲まれており、山荘を築くのに格好の場所であった。平安初期から貴族らが別業を造営し、中世には隠遁者が隠れ住んだが、その後の長い戦乱期には目立った山荘の造営はなかった。ようやく大安の世となった近世初期に、山荘の造営が再び盛んになった。特に、風景に関する教養も興味も深かった文人らによる、隠遁生活を目的とする山荘の造営が目立った。彼らは、地形を読む能力にも優れていたと考えられ、石川丈山のように作庭に秀でたものもいた。

京都の近世の文人山荘の特徴は、第一に、個人の小規模な山荘は立地選定が容易であったため、条件の良い環境の地を選んで山荘を造営した可能性が高いこと。また、山荘について記した文人らの手記が多く残っており、その場所を選んだ意図や、そこでの生活が把握しやすいこと。しかし同時に、個人の山荘なので衰退しやすく、当時の状態をよく残しているものが少ないこと、がある。

本研究の対象とするのは、著名な文人の名高い山荘である光悦寺、詩仙堂、大悲閣、藤原惺窩山荘、木下長嘯子山荘である。本阿弥光悦(1558-1637)は書家であり、陶芸・漆芸・出版・茶の湯に携わった芸術家であり、鷹峯に住み、光悦寺の地で隠遁生活を送った。儒学・書道・茶道・庭園設計に精通していた石川丈山(1583-1672)は、儒学の大家であった藤原惺窩(1561-1619)に師事した後、詩仙堂にて三十年に及ぶ隠遁生活を送った。惺窩も市原(京都市左京区)に隠遁した。土木事業家・書家・貿易商であった角倉素庵(1571-1632)は同じく儒学を惺窩に、書を光悦に学び、嵯峨に遊んだ。安土桃山時代の武将・江戸前期の歌人であった木下長嘯子(1569-1649)は、東山・拳白堂に隠棲し、その後西山の勝持寺付近に隠棲した。惺窩山荘と長嘯子山荘は現存しないが、風景を記述した文献が残り、位置も確認できたため対象に含めた。

## 3. 文人らの地形認識と山荘の景観特性

### (1) 本阿弥光悦による地形認識と山荘の景観特性

#### a) 光悦による眺望嘆賞と光悦寺の眺望特性

光悦の山荘の地、現在の光悦寺は、南方が紙屋川の溪谷に向かって傾斜する斜面地にある。光悦はこの地に「我住所として一字を立、茶立所などをしつらい<sup>2)</sup>」、

花鳥風月を友としつつ茶の湯を嗜む境地にあった。

光悦は、徳川家康から拝領したこの地が、景勝の地であると賞賛していた。「都の空打越して音羽山、稲荷山、深草山、伏見の里の空はるはると、遠かたに高山あり。春日山、三笠山にやと推しはかり眺めやる、山々四方に限りなくそ見えわたる<sup>3)</sup>」と、伏見周辺の山と里までの約10kmの遠景を眺め、さらに遠くの奈良の山々を想い眺めた。そのほか、眺望対象となったのは比叡山や、平野、北野、北野天満宮の森、一乗寺の里、鳥羽の田園、桂川などであった。特に興味を引いた眺望は、早朝の霧海で「目の及ぶ限り霧の海となり、しげりたる森は鳴のごとし<sup>4)</sup>」と記述している。このように、光悦の山荘は眺望の非常に優れた場所にあったことがわかる。

そこで、光悦寺からの眺望特性について、等高線から再現した眺めを図-1に、可視領域を図-2-Aに示す。光悦寺からは南東から東にかけて遠く俯瞰できることがわかる。光悦寺は都の北西の高台に位置しているために、都が見渡せることになる。

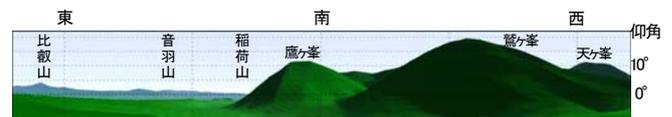


図-1 光悦寺からみた洛中と四方の山並み

#### b) 光悦寺における地形による圍繞性

光悦寺の景観特性は、単に眺望性の良さととどまらない。『行状記』に「東は加茂山、比叡山、如意が嶽、北は鞍馬、貴船、鷹ヶ峯西に當って纔に二丁計り隔りぬ。麓に紙屋川水草清く、都の内にも住みまされりと思ふばかりなり<sup>5)</sup>」、「都をはるかに隔てぬれば、思ふことなきにしもあらざりけん、我鷹ヶ峯は王城より纔に二十餘町なりとぞ悦びける、みちのくの松島を見ける人々、此鷹峯に及ばずと申しき<sup>6)</sup>」と書かれているように、光悦の山荘は、都より2km強、鷹ヶ峯の集落から約220m離れただけで、当時の名高い名所であった松島よりも優れた景色が得られ、さらに山や川も近く、都よりも住みやすい場所であると捉えている。このように光悦が「かく身に過たる面白處を住家として楽しみにふける<sup>7)</sup>」場所とした光悦寺の景観特性はどのような条件を満たしていたのであろうか。

ここで重要なのが、地形圍繞がつくり出す空間特性である。南南東から西にかけて、約500-700mの距離で地形によって圍繞された領域を形成している(図-2-A)。鷹ヶ峯は洛中からの視線を隠す役割を果たし、この地形圍繞の効果によって、都から近いながらも、領域性を感じながら自然の風物を身近に感じることができたと言えるだろう。圍繞された領域の内部に紙屋川が流れていることも重要な空間特性のひとつである。

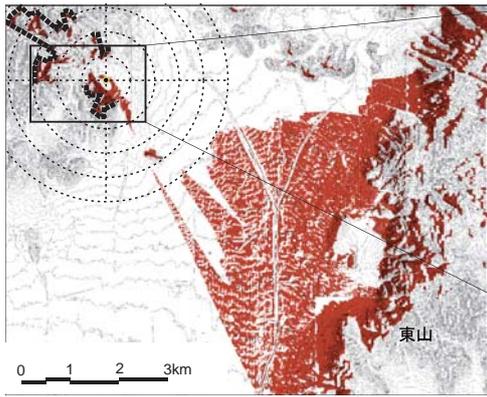


図-2-A

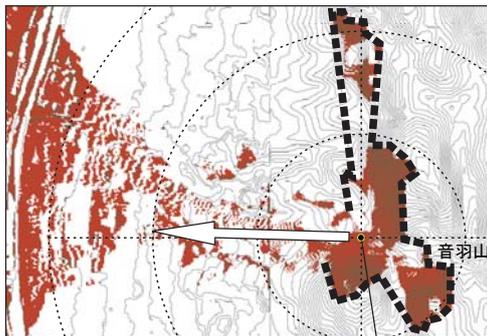
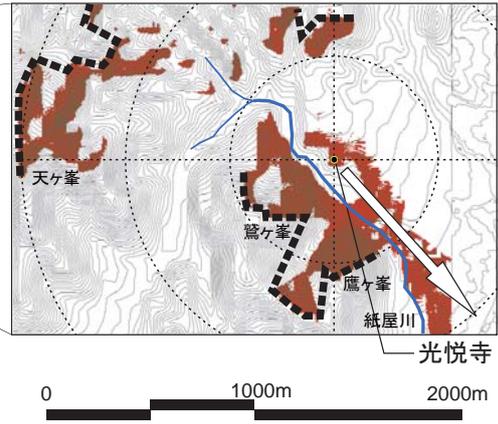


図-2-B

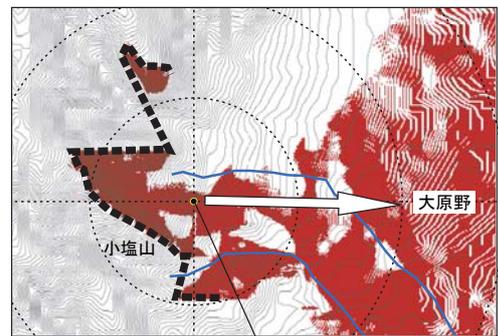


図-2-C

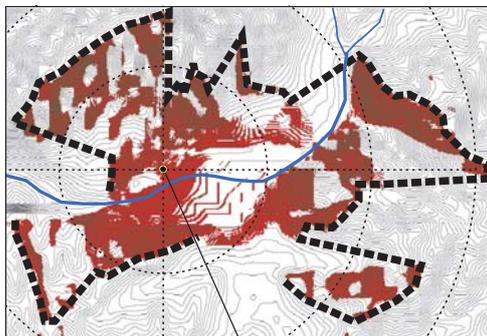


図-2-D

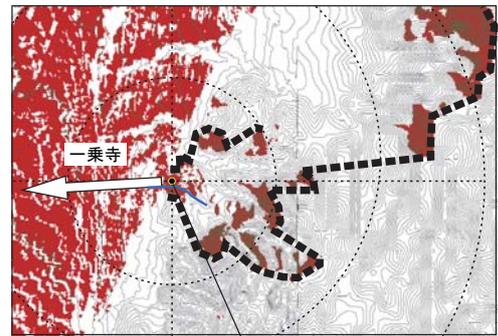


図-2-E

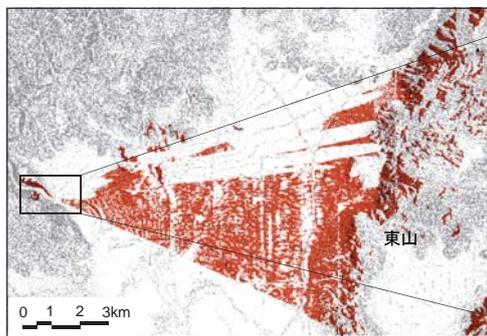


図-2-F

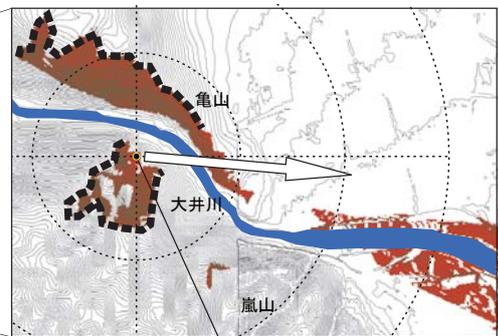
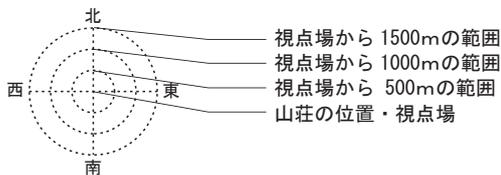


図-2-G



- 山荘からの可視領域
- 仰角0°以上の可視領域の境界
- 遠景の眺望方向

図-2 可視領域からみた圍繞領域と眺望方向

## (2) 木下長嘯子による地形認識と山荘の景観特性

### a) 長嘯子による地形認識と眺望嘆賞

木下長嘯子は小浜城主であったが、三十二歳で隠遁生活を始め、約四十年間を京都東山で過ごし、その後の十年間を西山で過ごした。その間、東山での隠遁生活を『山家記』に、西山での生活を『大原記』に記している。彼の文学作品は多くの人々に影響を与えたが、とくに、芭蕉の俳文に影響を与えたことが知られている。現在、これらの山荘は現存していない。

東山隠遁については、「挙白堂を本居の名とし、半日、独笑、寄亭等をかまへ、又待必楼には月をまち、松洞台、鳥羽観に眺望を極め、歌仙堂をまうけては六々の歌仙の図像をかけつらねなど、風流をつくして、幽栖とこそいへ、ひろく山谷、林園をしめられたる<sup>9)</sup>」と書かれているように、隠遁生活とはいえ、非常に大きな邸宅と庭園があり、風景を楽しむ場所が意図的につくられていたことが読み取れる。山荘の様子については、長嘯子自身が「山は、ふかからねどあらはならず<sup>10)</sup>」と書いており、完全に囲繞されるほど山深い場所ではないが、露見するほどではない、つまり、隠れるには十分な場所であると述べている。「かげよりほかにもた人しなれば、いと心やすく<sup>10)</sup>」という隠遁生活を送るには最適な場所とされたのである。

隠れ場所性を確保しながら、山荘からは優れた眺望も得られた。「ろうろうとかすみわたれる山の遠近、心もあくがれいでて<sup>11)</sup>」と、眺望を好んだ長嘯子は、山荘内の鳥羽観から「見はたせば鳥羽田の面の霧の海に沖の小島は秋の山かな」という歌を詠んだ(長嘯「挙集」)。

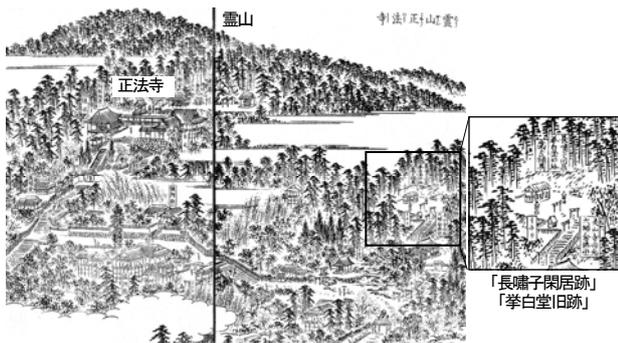


図-3 『花洛名勝図会』(1864)にみる長嘯子山荘跡

しかし、「昨日は東山わしの山陰に松の扉をしめ、けふは大原のすそわの田井に根芹をつむすごとなる<sup>12)</sup>」と、長嘯子は東山を捨てて、西山小塩(現在の勝持寺近辺)の山麓の田園に隠れ住むこととなる。『大原記』では、裏山や谷、田畑などの散策時にみた四季の自然の景物を賞している。

### b) 長嘯子山荘(挙白堂・勝持寺)の景観特性

東山の挙白堂のような、完全に囲繞されるほど山深く

はないが、隠れるには十分であるというような地形環境はどのようなものであろうか。図-2-B から、挙白堂は非常に奥まった地勢にあり、北から南西までの三方を、ほぼ500m以内の領域で地形によって囲繞されていることがわかる。しかし、同時に西方には俯瞰景が広がっており、可視領域が主に鴨川以西に広がっていることがわかる。

西山・大原野の勝持寺(図-2-C)も同様に、ほぼ500m以内の距離で地形によって囲繞されていることがわかる。挙白堂に比べると前方の近距離域に可視領域がより広がっている。ここは大原野の野辺にあたり、長嘯子は緑の野、秋の錦、萩、夕の空、雲、霧、虹などの四季の風物について『大原記』に記していることから、野辺の眺めを楽しみむ場所として場所を選んだと考えられる。



図-4 『実測大絵図』(1701)にみる勝持寺周辺の景観

勝持寺の景観特性は、挙白堂に比べると凹性が弱く、眺望性が優勢である。『山家記』では、主に山荘の敷地の内部を描いていたのに比べ、『大原記』では、敷地を越えた周囲の風物と、そこで遊ぶ自身を描くことが中心となっている。これらから、長嘯子の「隠れ住む」隠遁生活から、積極的に「自然と親しむ」隠遁生活への嗜好の変化が読み取れる。

## (3) 藤原惺窩による地形認識と山荘の景観特性

近代儒学の創始者といわれ、羅山、丈山、角倉了以を始め五千余名の門人を育てた藤原惺窩は元和元年(1615)市原山荘に移り住んだ。恵まれた自然に魅了されていた様子は丸味を帯びた市原の里を囲む山々を北肉山(きたししやま)と名付け自ら北肉山人と号していた。『京羽二重』によると、惺窩は周囲の風景を「市原八景」として、手月磧、朽斧松、巖牆水、北肉峯、流六溪、洗密科、枕流洞、飛鳥潭を挙げた<sup>13)</sup>。そのほとんどが水辺の景である。林羅山は「北肉山小絶二首并序」に、「北肉山の地は、洛水の源で、山を後にし水を前にし、その松峯桂壑紅泉碧磴石泉千声雲霞万色である<sup>14)</sup>」と述べている。ここから、山荘において、山を背に、水を前にし、周囲は四季の景物に囲まれた環境を、天然の庭園のように捉えていることが読み取れる。



図-5 『実測大絵図』(1701)にみる市原の景観

惺窩山荘からの景観特性は他とは少し異なる。北の山を背後としながら、小盆地によって 700m~1300m ほど大きく地形に囲繞され、また、一方への遠景の眺望がみられなかったため、強い領域性を有している。この領域の中を川が流れ、これらが景の主題となった。

#### (4) 近世の文人山荘における景観特性

詩仙堂と、大悲閣について、地形認識については後述するが、各景観特性を図-2-E, Fからみると、詩仙堂では、南の瓜生山と、北東の比叡山に囲繞されて領域性が生まれていることが読み取れる。そして、西方には一乗寺の里や洛中に向けて、俯瞰景が広がっている。

大悲閣については、背後を嵐山の凹地形に 100~400m の狭域で囲繞され、さらに北（前方）は亀山の尾根によって囲繞されている。この地形囲繞によって、四方に閉じられた領域を形成している。しかし、同時に、大悲閣が高所に立地することから、視線は亀山をこえて洛中や東山が眺められる。

表-1 山荘における囲繞と眺望の構成

	囲繞性		眺望性	
	構成要素	境界までの距離	視対象	眺望方向距離
光悦寺	鷹峯、鷲峯の山(前方)	200~500m	洛中、山並、野、川、霧海	西南 3km~
詩仙堂	瓜生山(前方)、松林	100m以内	洛中、山、月	全方位
大悲閣	嵐山(背後)、亀山(前方)	500m以内	山、川、船、洛中	東
勝持寺	小塩山(背後)	500m以内	田園、山	東
拳白堂	東山(背後)	500m以内	雲海、洛中	西
藤原惺窩山荘	北肉山(四方)	1500m以内	山	全方位

このように、近世の文人山荘は、隠れ場所としての囲繞性と、風景喫賞場所としての眺望性の両者の好条件を満たしている場所が立地場所として選ばれたといつてよい。山荘の多くが、凹地形を利用して、一方で非常に狭い範囲で地形囲繞を得ながら、一方で凸地形の上など、遠景の眺望、とくに俯瞰景を得られる場所が立地として選ばれていることがわかった。著者は以前、平安時代の

郊外の別業における地形囲繞の景観特性について研究を行った<sup>15)</sup>が、平安時代の別業では 1~3km の距離で囲繞される広域囲繞が目立っていたのに比べると、近世の文人山荘は非常に狭域に集中していることが特徴である。凹地形を利用しているのは、山深すぎず、都からも近くに、効果的に隠れられるという景観特性を利用するためであろう。近世の文人が隠れるのを好む背景として、隠遁思想や茶の湯文化の浸透などが考えられる。彼らの目によって、囲繞と眺望のバランスを組み入れた地勢の読み方はさらに洗練されていったといえる。

#### 4. 詩仙堂における視点場・眺望の景観デザイン

以下では、山荘の中で現存する事例（詩仙堂と大悲閣）をとりあげ、実際に景観特性を活かした視点場づくりの手法について、囲繞性、眺望性、水辺との近接性という観点から評価する。

##### (1) 石川丈山による詩仙堂の造営

詩仙堂は、1641 年に石川丈山によって一乗寺に作られ、彼が 31 年間もの隠遁生活を送った住居である。文人であり作庭家でもあった丈山は、当初から隠遁生活を目的として、植栽や水みち、地形に手を加えて、山荘を造営した<sup>16)</sup> (図-6)。

詩仙堂は京都盆地の北東隅、比叡山西南麓の高台に位置しており、洛中への眺望を得られる場所にある。地形的特徴として、眺望を得ることのできる凸地形の上でありながら、詩仙堂の南にある小山と、東山によって二方を囲まれ、身を潜められる凹性が生まれていることが挙げられる。また、敷地内は山から川が流れ、小さな谷となっている (図-7)。

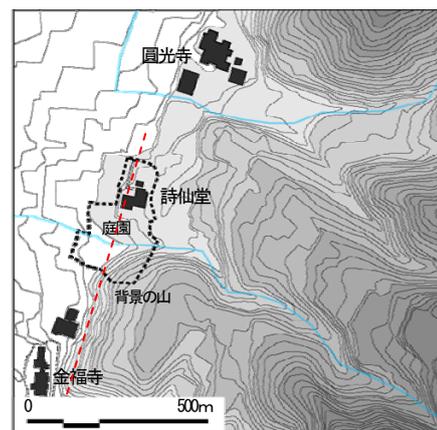


図-6 詩仙堂周辺地形図 (等高線 2m 間隔)

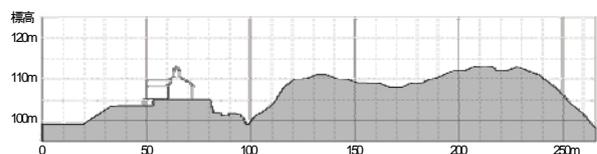


図-7 詩仙堂周辺の広域断面図

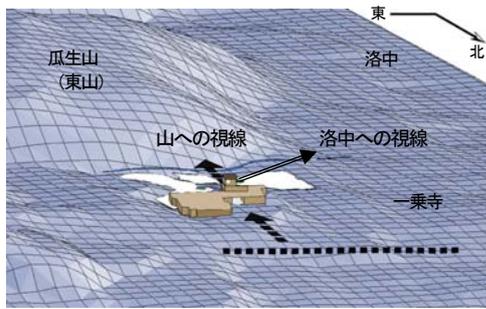


図-8 詩仙堂周辺の地形環境

## (2) 景観特性を生かした風景づくり

詩仙堂では、この固有の地形環境をいかして、非常に個性的な視点場のデザインがなされている。詩仙堂には、主に2つの視点場が作られている。詩仙堂一階で方丈庭園に面した「蜂要」と、同三階部分「嘯月楼」である。

ここで、地形環境の中での視線方向の操作について述べる。詩仙堂を門から南に奥へと進み、方丈（蜂要）へ、そのさらに奥が庭園、その奥が山となっている（図-8、図-9、図-10）。蜂要は、この軸線に平行方向、つまり南の山側のみに開いている。しかし、嘯月楼は東西南北に窓を有し、四方の眺望が、特に洛中への眺望が得られるようになっている。この二視点場の眺めと、視点場からの可視領域を示したものが図-11である。

### a) 「蜂要」からの眺望

蜂要の座敷に座ったときには、枯山水の方丈庭園が手前に、その奥に庭園の背景としての山が視界を占める。他の方角については、植生によって視界がさえぎられていて不可視である。ここで、背後の山への仰角 19 度前後となり、これはスプライレゲンがいう「囲まれ感」の最小値の仰角 18 度を満たす<sup>17)</sup>。庭園の背景となる地形と植生による囲繞性が蜂要の重要な景観特性である。



図-9 詩仙堂敷地平面図

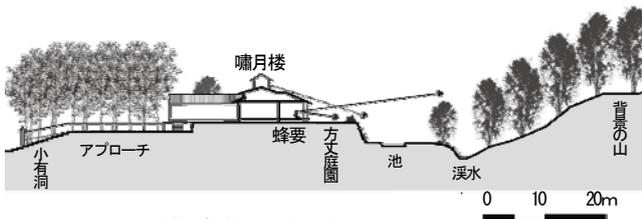


図-10 詩仙堂敷地断面図

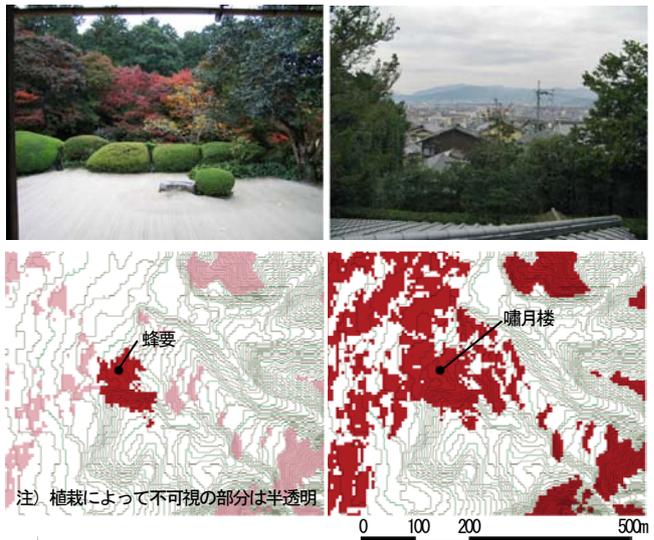


図-11 詩仙堂からの眺めと可視領域 (左:蜂要, 右:嘯月楼)  
(国土地理院発行 5mメッシュ標高データをもとに地形モデルを作成)

さらに、背景となっている植生への距離は約 25~30 mで、これはブルーメンフェルドのいう人間的尺度である<sup>18)</sup>。丈山が詩仙堂十二景の一である「園外松聲」の「森立龍蛇勢、隔岸聳山雲（中略）肅肅盪世気<sup>19)</sup>」（森の松は並び立ち、天にも登る勢いで、岸を隔てて山雲に聳えている。…肅々として俗気をあらう。）は、方丈の背後の山の松林が「俗気をあらう」仙境の景色として詠まれている。地形囲繞が作り出す狭域の領域のなかに仙境の世界観を感じることでできる蜂要は、まさに隠者が棲むのに適した凹性、「隠れ場」性をもった視点場であるといえる。

### b) 「嘯月楼」からの眺望

「嘯月楼」は蜂要の上階の三階部分を指す。「年譜」によると嘯月楼は「詩仙堂の上に楼を架して群書を貯える。四部をならべ、興到れば、欄によって月に対し、飲酒朗吟する<sup>20)</sup>」場所であった。広さは約二畳で、窓は東西南北にあり、周囲を見晴らすことができる場所である。南の山への仰角は、嘯月楼からは約9度となっており、囲繞性は消失している<sup>21)</sup>。西向きの眺望については、1階蜂要からは見えなかった一乗寺の集落や洛中を一望することができる。詩仙堂十二景のうち「洛陽晚煙」、「砌池印池」、「難波城楼」などの遠景を詠んだ漢詩は、ここで詠んだと考えられる。この嘯月楼は、詩仙堂の敷地を越えた大スケールの眺望性をもった視点場であるといえる。

このように固有の地形環境を利用することで、凸性＝眺望性と、凹性＝隠れ場所性という、全く性格の異なった2つの視点場が、一つの建造物の中で生み出されていた。隠れ住みながら、景色を楽しむといった隠遁生活にはふさわしい意匠であるといえる。

## 5. 大悲閣における視点場・眺望の景観デザイン

### (1) 角倉了以・素庵による大悲閣の造営

大悲閣は、保津川舟運開通の功のあった嵯峨の角倉了以が、河川工事に協力した人々の菩提を弔うために、もと清涼寺の西方中院にあった千光寺を慶長 19 年 (1614) に現在の地に移建し建立したのが始まりである。その後、「素庵、父に嗣ぎて嵯峨に居り、宅を河側に造る、嘗て惺窩を招き、水邊に遡遊す、奇石激湍左右に掩映し、勝景頗る多し、諸を惺窩に請ひて、其地境の故套を改む<sup>22)</sup>」とあるように、文人でもあった素庵がこの地を山荘として利用し、藤原惺窩とともに遊び、「嵯峨の十景」が選定された。最盛期には境内約 99,000 m<sup>2</sup>あり、清らかで風雅な地のうちに小堀遠州好みの茶室臨水亭や素庵の読書堂などがあったという<sup>23)</sup>が、維新以来は堂塔も衰頽した。

### (2) 景観特性を生かした敷地計画

大悲閣は嵐山の中腹の平場に位置し、山地斜面を利用した懸崖建築となっている。この大悲閣は、「四季風景山城第一ノ名勝タリ。殊ニ當寺ハ前ニ亀山有リ、洛中及東山諸名所ノ眺望絶景ナリ<sup>24)</sup>」と評された、絶景の地であり、これは今も変わらない (図-12)。遠景の眺望だけでなく、眼前に亀山の存在を捉えている。文人・林羅山も大悲閣について、「山高きこと二〇丈(約 60m)許り、壁立(切り立った山の形)谷深し、右に瀑布有リ、前に亀山有リ、直に洛中を視る、河水亀嵐の際を流れ、舟舳之来去を居然として(居ながらにして)見る可し<sup>25)</sup>」(括弧註筆者)と書いたように、部屋に居ながらにして山並と川と舟運が眺められた。



図-12 「洛西嵐山大悲閣眺望之図」 (1891)

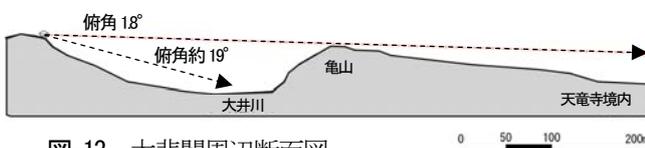


図-13 大悲閣周辺断面図

の領域に亀山と大井川を俯瞰し、俯角約 2°で双岡 (距離 4.2km) を俯瞰、距離 15km 以上の遠景として洛中と東山を一望する (図-13, 図-14)。大悲閣は、現在の位置よりも低ければ、亀山の向こうに見えるはずの洛中が見えなくなる位置に立地している。景勝の地、すなわち眺望に優れた地を選んだことは前述したが、そのなかでも地形の最も突き出た部分を選び、木組みをして本堂を舞台のように浮き上がらせ、東方に窓を開放的に開いている。



図-14 大悲閣 室内からの眺望

このように、優れた眺望性を有しながら、前方の亀山と後方の嵐山の凹地形による囲繞によって、領域性を確保している。さらに、その領域内には、大井川が流れ、これも俯瞰できた。嵯峨を一望し、かつ高い領域性を有していた大悲閣で「嵯峨の十景」が選ばれたことも考えると、大悲閣を中心として山並と川がつくる景域は、一つの大きな庭園のように見立てられていたという考えることもできる。

## 6. 結論

近世の文人山荘の立地と、その場所の景観特性を調べた結果、山荘は、地形の凹凸を利用して、隠れ場所としての囲繞性と、風景嘆賞場所としての眺望性を、ともに満たしている場所が、立地場所として選ばれていた。平安時代の郊外の別業と比べると、近世の文人山荘は非常に狭域の囲繞が多いことがわかった。凹地形を利用しているのは、山深すぎず、都からも近くに、効果的に隠れるという景観特性を利用するためであると考えられ、隠遁思想や茶文化の浸透を背景として、近世の文人らは、囲繞と眺望のバランスを組み入れた地勢の読み方をさらに洗練させたと言えるだろう。

さらに、現存する文人山荘の視点場の景観構造を調べた結果、詩仙堂では、同建築内の2つの視点場から、固有の地形環境を利用して、全く性格の異なる景観が得られるようにつくられていることが分かった。一階の蜂要からは、視線方向を南に限定し、庭園とその奥の山肌を

見せ、圍繞性が非常に強く、凹性・隠れ場所性が優勢の景観である。それに比べて、同三階の嘯月楼は、視線方向を四方に広げ、開放的な造りにし、圍繞性を弱め、逆に凸性・眺望性が優勢の景観が得られる。隠れ住みながら、景色を楽しむといった隠遁生活にはふさわしい意匠が、小さな敷地の中で、地形環境を活用することで可能であった。

また、大悲閣では、優れた眺望性を有しながら、前方の亀山と後方の嵐山の凹地形による圍繞によって、領域性を確保している。大悲閣を中心として山並と川がつくる景域は、一つの大きな庭園のように見立てられていたという可能性が示唆された。

他の文人山荘の例を見ても、圍繞と眺望のバランスに腐心していたことが文献から読み取れた。地形環境を利用し、敷地の内で閉じるのではなく、周囲の野や山並を自らの庭に見立てて、大きな景域というスケールで風景を楽しんでいたことが示唆された。

**謝辞：**本研究にあたり、広島工業大学環境学部樋口忠彦教授には貴重なご指導を賜りました。ここに厚く感謝の意を表します。

## 参考文献

- 1) 樋口忠彦, 日本の景観, p 203, 筑摩書房, 1993
- 2) 佐野紹益, にぎはひ草; 近世文学資料類従 / 近世文学書誌研究会編 仮名草子編11, 1973
- 3) 前掲 にぎはひ草
- 4) 本阿彌行状記; 光悦會編, 光悦, p 195, 芸艸堂, 1916
- 5) 前掲 本阿彌行状記; 光悦, p 194
- 6) 前掲 本阿彌行状記; 光悦, p 195
- 7) 前掲 本阿彌行状記; 光悦, p 196
- 8) 伴蒿蹊著, 中野三敏校注, 近世畸人伝, 中央公論新社, 2005
- 9) 木下長嘯子, 山家記; 松野陽一, 上野洋三校注, 近世歌文集 上, p 33, 岩波書店, 1996
- 10) 前掲 山家記; 近世歌文集 上, p 35
- 11) 前掲 山家記; 近世歌文集 上, p 35
- 12) 木下長嘯子, 大原記; 前掲 近世歌文集 上, p 45
- 13) 京羽二重; 野間光辰編, 新修京都叢書 第2巻, 臨川書店, 1993
- 14) 林羅山, 北肉山小絶二首并序; 山本四郎, 石川丈山と詩仙堂, p29, 山本四郎, 2002
- 15) 山口敬太, 出村嘉史, 川崎雅史, 平安京郊外の別業における地形圍繞の景観特性に関する研究, 土木計画学研究・講演集No. 36, 2007
- 16) 前掲 石川丈山と詩仙堂, p121
- 17) P.D. スプライレゲン, アーバンデザイン, 青銅社, 1966  
スプライレゲンは, 仰角45度 (D/H=1) で「完璧に囲まれた感じ」, 仰角18度 (D/H=3) で「囲まれ感の最小値」, 仰角14度 (D/H=4) で「囲まれ感が消失する」としている。
- 18) 高橋研究室編, かたちのデータファイル デザインにおける発想の道具箱, 彰国社, 1984
- 19) 前掲 石川丈山と詩仙堂, p135
- 20) 前掲 石川丈山と詩仙堂, p121
- 21) 前掲 アーバンデザイン

- 22) 東条琴臺著, 堀田璋左右, 川上多助共編, 先哲叢談續編 卷之一, 國史研究会, 1917
- 23) 嵯峨教育振興会編, 嵯峨誌 平成版, p. 338, 嵯峨教育振興会, 1998
- 24) 石田有年画, 洛西嵐山大悲閣眺望之図, 1891, 京都府立総合資料館所蔵
- 25) 角倉了以翁碑文, 1630; 前掲 嵯峨誌, p. 465-471